

SPIE2008 マルセイユ報告

天体望遠鏡と観測装置に関して隔年開催のシンポジウム SPIE Astronomical Instrumentation が、2008年6月22日-28日の7日間にわたり、マルセイユで開催された。SPIE2008では、「宇宙望遠鏡と装置 I」, 「宇宙望遠鏡と装置 II」, 「地上望遠鏡」, 「地上望遠鏡観測装置」, 「光干渉計」, 「補償光学」, 「観測所運用」, 「システムエンジニアリング」, 「先端技術」, 「ソフトウェア」, 「ミリ波・サブミリ波」, 「検出器」の合計12のコンファレンスが並行して進行し、2,100名が参加、1,800論文が発表された。全論文の共著者の総数は4,500名に達する。共著者リストで見た日本人数は350名に達した。実際の参加者内訳は米国から約50%、欧州から約30%、そのほかから20%で、日本からの参加者は、約100名程度であったと思われる。

今回は、組織委員長 A. Moorwood (ESO), M. Clampin (NASA), 組織副委員長 D. Simons (Gemini) と家 (NAOJ) の4名で事務局とともに全体を企画した。特別招待講演としてCOBEでノーベル賞を受賞した J. Mathar の「ビッグバン、ノーベル賞, JWST」, ESA の F. Favata の「欧州スペース天文学の展望」, ESO の新台長 T. de Zeeuw の「地上天文学の展望」, また特別企画として「Early Universe」と題した半日の全体セッションを設けた。この全体セッションでは S. White (標準宇宙モデル), D. Spergel (WMAP), D. Eisenstein (宇宙の音波振動), P. Astier (超新星宇宙論), P. Madau (宇宙再電離), M. Iye (高赤方偏移銀河探索), R. Wyse (銀河考古学), M. Longair (次世代装置による宇宙論) が観測的宇宙論の現状をレビューした。1,200名収容の大ホールには多くの参加者が集まった。家はすばるのライマン α 輝線銀河探索の成果を軸に講演させていただいた。

会期中のマルセイユは快晴続きで、夏時間の19時頃に会議が終わったあとも南欧の強い日差しが残っている状態であった。パーティションで区切った一部の会場で音漏れが問題になったり、ポスタースペースが足りず展示が一日しかできない、会場の椅子が足りず床に座る人が多くいた、無線LANがつながりにくいなど、運営にはいろいろと反省課題があったが、Orlandoで開催されたSPIE2006からの各分野での発展は著しく、組織委員会では、毎年開催の希望すら出たほどである。さすがに反対者が多かったが。

組織委員会では、次回SPIE2010は2010年6月27日から7月2日にわたり、San Diegoで開催することを決めた。SPIEは1990年代初めから米国で交互に開催してきたが、日本や中国、オーストラリアでの開催も視野に入れて三極でのローテーションでの開催の提案があり、議論の結果SPIE2012の日本での開催を検討することとなった。会場や渡航費・宿泊費の調査の結果を経て、最終判断することとなる。実は2004年のSPIEのころから日本での開催について打診があったのだが、受け入れ体制を検討するゆとりがなかった。すばる望遠鏡の成果や、ALMAやELTでの国際協力、ISASのスペース国際ミッションの存在感などを考えると、京都でのIAU総会開催(1997年)や、名古屋でのCOSPARの開催(1998年)などに続き、遅ればせながらSPIEの日本招致を検討すべきと考える。SPIEは事務局がLOC業務をかなりこなすのでIAUのLOCのときほどの人的負担は大きくないと思うが、開催が決定した暁には、日本天文学会のご支援をぜひお願いする次第である。

家 正則 (SPIE2008 組織副委員長)